

◆活動報告

日中青年友好交流訪中団の派遣

2015年11月下旬、華人教授会議は中国大使館から年度内に日本の大学生を中心に訪中団を組織できないかという相談を受けた。華人教授会議だけでは、このような緊急任務は担えないため、早速、日中科学技術文化センターに連絡し、共同でこの任務を達成することとなった。

巨東英教授が総団長、凌星光教授を顧問とする組織が形成され、センタースタッフの協力の下、総動員で準備態勢に取り組んだ。まずテーマを「等身大の中国を見る」と決め、訪中期間を12月23日から29日と定めた。江蘇省、浙江省、福建省の三コース、各コース約30名とした。中国国内の受け入れ態勢を整えると共に、華人教授会議メンバーを推薦者として参加者を募った。12月4日に募集案内を出し、申込期限は12月12日とした。応募期間は僅か一週間である。年末で忙しい中、華人教授会議メンバーは緊張感をもって対応し、周りの日本人大学生に積極的に働きかけた。その結果、短期間で多くの応募者が集まり、140名でストップをかけることとなった。

12月20日、学生会館で説明会兼壮行会を開き、大使館の公使参事官薛劍氏が励ましのスピーチを行った。



Aコース江蘇省、Bコース浙江省、Cコース福建省は、それぞれ分団長、副分団長が統帥した。各コースは何れも問題なく無事に、友好交流の旅を全うした。

ここで特記すべきは、巨東英教授が総団長と

して傑出した総指揮ぶりを発揮したことである。また華人教授会議のメンバーでもある上海交通大学教授季衛東氏が献身的に協力してくれ、すべての団の接待に応じてスピーチし、日本人大学生に深い感銘を与えたことである。

1月22日、各コースの代表約50名が中国大使館に赴き、今回の訪中成果報告を行った。劉少賓公使と薛劍公使参事官が参加され、今回の訪中成果を高く評価して下さった。

参加者のアンケートには次のような感想が語られた。

A団では「中国に対する印象が180度変わった。中国のことがもっと好きになった」、「旅行か留学でまた中国へ行きたい。もっと中国を知りたくなった」、「この旅でできた中国人の友達と連絡を保ち、また中国で会いたい」、「少数民族の文化に触れて、中国が多民族国家であることにすごく感銘した」。

B団では、「中国人は反日感情を持ち、日本人を目の敵にしていると思っていたが、みんな親切だったので嬉しかった。中国人に対する印象が変わったし、イメージで決めつけてはいけないと思った」、「大気汚染はひどいと感じたが、日本をはじめ世界各国が生産ラインを中国に設けているのだから、解決には世界的な協力が必要だ、日本も経験を共有すべきだ」など建設的な意見も聞かれた。

C団では、「中国経済発展のバイタリティーを目にした」、「歴史文化の深さを体験した、とりわけ「張芸謀氏の『印象シリーズ』第五作目『印象大紅袍』のチャレンジ精神に圧倒された」、「中国の多様性、多民族国家への理解が深まった」などの声が多かった。他方、「表はきれいだがちょっと裏側に回ると汚い、身体障害者の物乞いもあり、やはりまだ発展途上国だ」という率直な見方も示された。なお、2016年2月2日には、中国をもっと理解するための有志参加の学習会が催された。

(文責：一般社団法人日中科学技術文化センター理事長 凌星光)